

## 英詩に見る子供の姿 (二)

松原至大

### 誕生の日 (古謡)

月曜日の子供は、顔が美しい、  
火曜日の子供は、禮儀正しい。  
水曜日の子供は、悩みが多い。  
木曜日の子供は、遠くへ行く、  
金曜日の子供は、かわゆらしくて御機嫌、  
土曜日の子供は働きの、  
それから安息日に生れた子供は、  
美しくて利口で、すなおで元氣。

安息日は英國でサバス・デーと云いますが、これは申し上げるまでもなく日曜日のことであります。イギリスに傳えられる古い作であります、誰れの作であるかは、わかりません。このような詩は、世界の各國で見られるもので、わが國にもこれに似たものが見出されます。その詩の持つ思想とか、形式とかと云うものは、當然その

國々の民情によつて一樣ではありませんが、詩の中にこめられた思想は、皆一つであるように感じられます。即ち自分の子供がよい子であれかしと願う心情であります。

### 乳母の歌 (ウィリヤム・ブレイク)

子供の聲が、芝地しやちの上で聞えると、  
笑いの聲が、小山の上で聞えると。  
私の心は、私の胸の中でほつとする。  
なにもかも安心。  
『もう、歸りましょう、皆さん、  
お日さまがおかくれよ、  
夜露よつゆがおりますよ。  
さあ、もうお遊びやめましょう、  
お家へ歸りましょう、  
また朝が、お空に見えるまで。』

『いやだよ、遊んでるんだよ、だつてまだ明るいんだもの。』

まだお床へ入るのはいやなんだよ。それにお空で、小鳥がとんでるよ。

小山は羊でいつばいよ。』

『はい、はい、行つて、遊びましょう、すつかり明るさが消えるまで、それからお床へ入りましょ。』

子供ははねたり、大聲出したり、笑つたり、

小山にそれがこだます。

ウィリヤム・ブレイク（千七百五十七年—千八百二十七年）は、イギリスの畫家で、詩をよく作つた人であり、ロンドンの貧しい靴下職人の子として生れて、正規の學校へも行かず、十歳の時にパースと云う人の畫塾に入つて、繪畫の道を歩き初めました。詩を初めて作つたのは、十一歳頃からと云われます。繪の多くは版畫で、それにもられたと同じような神秘と象徴の香が、詩にも高くにおつています。殊に子供のためにうたつた詩には、平明な言葉の中にも、彼の力強い精神が表現されているように思えます。

おさな兒ジヨイ（同じく）

『私には名がない、生れてたつた二日。』

『私はあなたを  
なんと呼びましょうか。』

『私は幸、』

ジヨイが私の名。』

『美しいジヨイ、』

かわいいジヨイ、生れてたつた二日。

かわいいジヨイと呼びましょう。

あなたは笑つている。

その間、私はうたつています。

かわいいジヨイが  
あなたを包んでいます。

ジヨイは「喜び」の英詩です。生れたばかりの子供は、その父母にとつて、喜びそのものでありましょ。従つてまだ名はつけられていないのですが、喜びそのものが、わが子の名ともいえましょ。ブレイクはその心持をとらえて、詩に表したのであります。私は今ここに原語のジヨイをそのまま使いましたが、そのかわりわが國の「喜び」という言葉を使つてもよろしいのです。

雨、雨、やんどくれ（マザー・グース）

雨、雨、やんどくれ、

またいつか来ておくれ、

アーサーちゃん遊ぶよ。

のらり、くらり (同じく)

のらり、くらり、

お十時さん、

どうしてこんなに

はよ来たの。

いつも来るのは

十時だに、

今日は、

おひるにやつて来た。

赤ちゃん (同じく)

あん、あん、赤ちゃん、

泣きなちやい。

お指をお眼にこつこんで、

母ちゃんところへかけてつて

僕ぢやないよと言つておいで。

これはいづれも、皆さんが御存じの「マザー・グース童謡集」の中にあるものです。學者の研究によつて、いろいろな考證がたてられておりますが、マザー・グースの名をつけた童謡集が、イギリスで初めて出版されたの

は、千七百六十年のことで、編者はジョン・ニューバリーでありました。それに收められた歌の数は、五十一といわれております。それが年の立つのに従つて、今までのものが作りかえられたり、また新しくつけ加えられたりして、今日では五百に近いものとなつています。その一つ一つが、彼の地の民情の中から生れたもので、異國のものが見ると、かなりに素養のある人でも、理解し得ない作が多いのでありますが、彼の地の人たちには、幼い子供にも理解されて、思はずほほえませるものばかりであります。永い間その國につたえられたもので、生れるとから、その父母親たちに致えられて、いつとはなしに自分のものとなるのでありますから、當然のことであるでしょう。これを今日のわが國の場合にあてはめて言えば、わが國古來の童謡なり、民話なりが、敗戰國の故にかなりに整理されたとは言え、わが國の幼い人たちには理解されても、異國の大人に會得し得ぬものが、まだ澤山あるのと同じことでありましょう。

しかしながら「マザー・グース童謡集」の中にも、國境を越えて、世界のどこの人にも理解し得るものが、少くないのであります。私がこゝに掲げたのも、その中の例であります。どこの子供も、雨はきらいであります。また朝寝をして、學校へくるのがおくれて、先生にしかられる子供も、少くはないのであります。自分が赤ちゃんと泣かせておきながら、自分ではないよと、赤ちゃんに言わせようとする三太郎は、わが國にばかりいるのではないのです。そう言う子供たちの姿をたくみにとらえて、笑いの中に子供たちに教訓をあたえようとする作であります。